

犯罪被害者週間中央イベント基調講演

性犯罪被害の実態と
被害者への支援

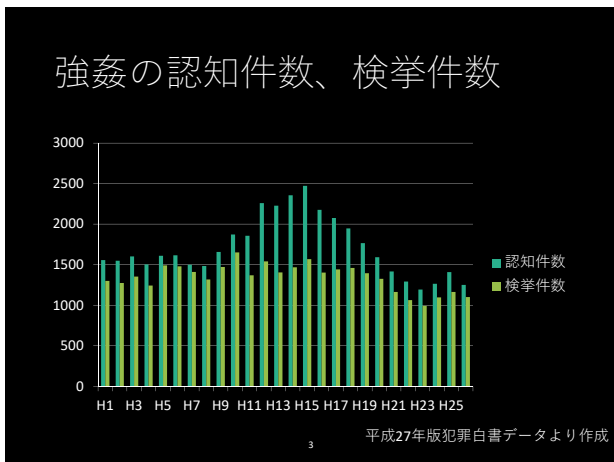
武蔵野大学
小西 聖子

【スライド1】

性犯罪被害の実情

性犯罪はどれくらい警察に届けられているのか。性暴力はどれくらいの人が経験しているのか。

【スライド2】



【スライド3】

日本における性暴力の被害率

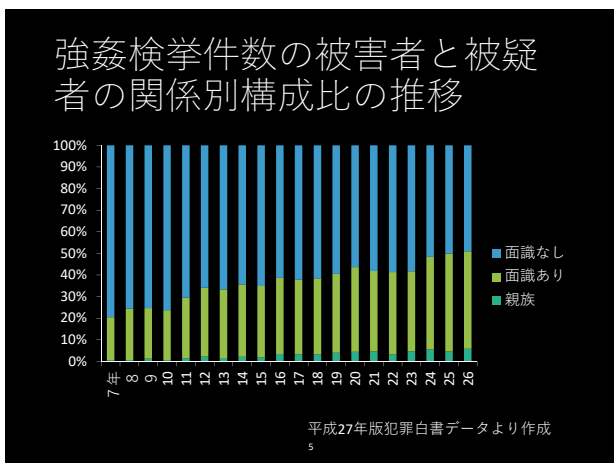
女性の約15人に1人は異性から無理やりに性交された経験がある

被害を受けた女性の約7割はどこにも相談していない

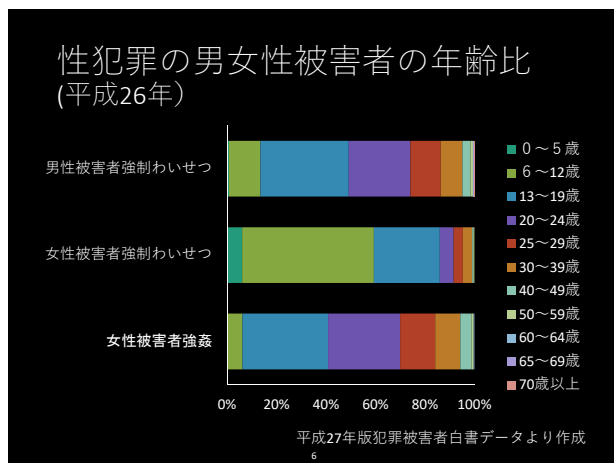
- 内閣府男女共同参画局「男女間における暴力に関する調査」
- 平成26年12月(20歳以上女性1,811人)実施

4

【スライド4】



【スライド5】



【スライド6】

性犯罪被害が心身に与える影響

長期にわたる深刻な影響がある

【スライド7】

性暴力被害の影響

リプロダクティブ・ヘルス
(Reproductive health;
性と生殖に関する健康)

婦人科系の外傷
意図しない妊娠
危険な妊娠中絶
性機能障害
エイズを含む性感染症

精神健康
(Mental health)

うつ病
心的外傷後ストレス障害 (PTSD)
不安神経症、睡眠障害
身体的怒怒、自殺行動
パニック障害

行動上の影響
(Behavioral)

リスクの高い行動
(例：無防備な性行為、若年期の同意に基づく性的関係、複数パートナーとの性行為、アルコールや物質の乱用)
犯罪や性暴力被害
加害者の高いリスク

生命に係わる転帰
(fatal outcomes)

以下による死亡
自殺、妊娠合併症、危険な妊娠中絶、エイズ、レイプ中の殺人、レイプによって生まれた子どもの被害

8 出典：WHO (2012) より引用抜粋

【スライド8】

図1-2. 犯罪被害者のメンタルヘルスの大規模調査：内閣府犯罪被害類型別継続調査 (2016)

- インターネットによる調査
- 2,200人のweb標本
- 1,300被害者中、500人が回答
- 900対照群中、700人が回答

内閣府 (2016) 平成26年度犯罪被害類型別継続調査報告書

9

【スライド9】

図1. トラウマ体験を持つ人におけるPTSDの生涯有病率(米国女性)

10

【スライド10】

図1. トラウマ体験を持つ人におけるPTSDの生涯有病率(米国男性)

11

【スライド11】

東京東部の精神科クリニック (性暴力被害ワンストップセンターと連携) での調査 (浅野, 2016)

変数	
性暴力被害女性 *	N=30
年齢	27.4歳±7.5歳
うち未成年	16.7% (小学、中学、高校生含む)
精神科既往歴あり	56.7%
被害後3か月以内	56.7%
レイプ	56.7%
被害時アルコール摂取	46.7%
過去の被害歴	36.7%

* 2012年6月から2015年11月末にSARC紹介により初診となった患者

12

【スライド12】

主診断の分布(浅野、2016)

診断名	診断数	%
急性ストレス障害	2	6.7%
PTSD	23	76.7%
適応障害	3	10.0%
なし	2	6.7%

13

【スライド13】

SARC東京と連携した臨床の印象

- 若い被害者が多い
- 早期に来所する人が多い
- PTSDの症状が出現する人が多い
- 早くつながる人、誰かが支援してくれる人は回復が早い。
- 孤立していること、受診が困難なこと、経済的な問題などがあると回復の困難さが増す。

14

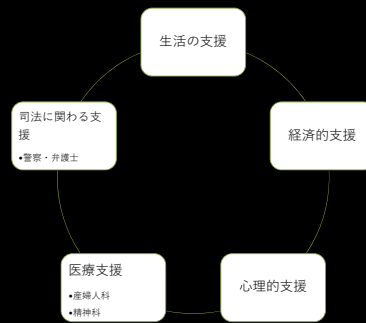
【スライド14】

性犯罪被害者に対して必要な支援

多様な支援
二次被害

【スライド15】

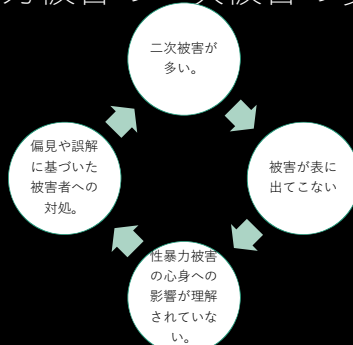
多様な支援が必要である



16

【スライド16】

性暴力被害の二次被害の多さ



17

【スライド17】

性暴力被害者への捜査、裁判中によく聞く疑問—二次被害に直結

- 見かけは元気そうである。(⇔やつれて可哀そうだ。)
- 被害にあったのに、なぜ新たな性的な関係を持つのか。(怖くて避けるのが当然だ)
- 被害にあったのになぜ危ないことをするのか。
- 記憶がないと言うが都合の悪いことだけ、「覚えていない」のではないか。

18

【スライド18】

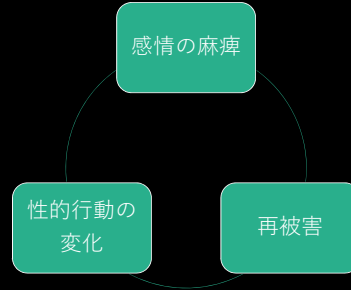
なぜ抵抗しないか

- ・ 殺されると思えば、抵抗しないのが当然
 - ・ 「抵抗すれば殺されるのではないかと思ったので、むりやり笑顔にしようとした。」 「せめて妊娠しなくなかったので、コンドームをつけてほしいと言った。」
- ・ 怖ければ、解離して、麻痺してしまうことも多い。
 - ・ 「途中から恐怖心が無くなり、何も考えなくなった。抵抗していない。」 「そこからどうなったか記憶が無い。」
- ・ 自分より体格が大きく、力で強制する人には抗しないのが普通。特に女性には一般的にそれが適応的な対処法である。
- ・ 人は命を守るように反応するが、強姦の被害に合えば、その後に大きな心的外傷を残す（強姦 > 身体暴力被害）

19

【スライド19】

性暴力被害のわかりにくいところ



20

【スライド20】

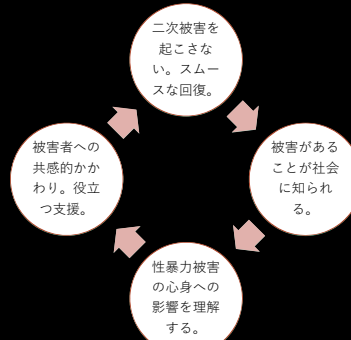
性被害の支援のポイントとなること

- ・ 二次被害の防止
 - ・ 性暴力被害に関する偏見を持たないこと
 - ・ 被害についてよく知ること
 - ・ 被害者についてよく知ること
 - ・ 当事者の決定を尊重すること
 - ・ トラウマ反応について知ること
- ・ 孤立を防ぐ
 - ・ 一緒に考える・支える人がいること
 - ・ 信頼を裏切らないこと

21

【スライド21】

性暴力被害の二次被害をへらす



22

【スライド22】

性暴力被害救援センター・東京 (SARC東京)

SARC東京

24時間ホットライン
被害直後の面接相談
産婦人科的医療の提供
警察への通報
弁護士紹介
精神科医紹介
付き添い同行支援



23

【スライド23】

身近な人が性犯罪被害を受けたら・・・

被害直後の人は最初は身近な人に連絡することが多い

【スライド24】

いつの時期でも

まず確かめること・知っておくべきこと

- **安全、安心**—再被害の危険、身体的な受傷はないか？
- **日常生活**—このまま生活していけるのか？誰か支援してくれる人はいるのか？
- ソーシャルサポートの重要性
- 正しい具体的な情報が必要
- 心理的サポート

25

【スライド25】

まず、安全+安心

- **安全**を確かめる
 - 身体は？けがをしてないか？
 - 加害者は？今はどうしている？
 - 警察へ連絡するのならなるべく早いほうがよい
 - 救急、産婦人科の受診が必要な場合
 - 性感染症
 - 妊娠を防ぐ／妊娠に対処する
 - 証拠採取
- これから生活は大丈夫？

26

【スライド26】

安全+安心+相談

- とりあえず少しでも**安心**できるように
 - なかなか難しい
 - 自分もショックを受けるので反応してしまう。(拒否、否認、時には麻痺)
 - 身近に相談できるワンストップ支援センター、被害者支援団体、地域の相談などがあれば、なるべく早く相談する。早くなくても(後からでも)相談するとよい。警察にも相談機能もある。
 - ここなら必ず大丈夫、ということはない。どこから支援につながってもよいが、現状では、「ここは助けにならない」と思ったら、別のところに相談した方がよいと思う。

27

【スライド27】

次にリラックス

- 当事者は、緊張したままである。
- 少しでもリラックスできるように。
- いつもやっていること、いつも食べているもの、いつも見ているもの、いつも話していること
- それでも当日は眠れないのが普通だし、正常なことである。

28

【スライド28】

時間がたつとよくなる

- 被害から1、2日は具合が悪くても、だんだん良くなることが多い。
- そのまま衝撃から立ち直っていく人もいる。
- ただ、気持が麻痺したり、無理に忘れようとして、表面だけ保っている人もいる。この場合、後で症状が出ることもある。
- 直後から平静な人はむしろ注意が必要。
- 事前にストレスがあったり精神科にかかっている場合も要注意。

29

【スライド29】

眠れなかったり、怖くて何かができな
かったりが続いたら、精神科に。

- よくある症状
 - 男性が怖くて人混みにいけない。
 - 混んだ電車に乗れないので学校や会社に行けない。
 - 怖い夢を見る。
 - 事件と関わるようなテレビのニュースを見たり、似たような人が出てくると、見ていられない。
 - 事件に関わることがあると記憶が思い出されて、動悸があり、冷や汗をかいたりする。
 - 自分が汚れてしまって価値がないと思える。

30

【スライド30】

そばに誰かがいて、
いっしょにその人のために考えてく
れることは、
被害者にとって一番のサポート

31

【スライド31】